

免疫療法、治療の第4の柱に

がん社会 を診る

中川 恵一

がんの治療では、健康保険でカバーされる「標準治療」を受けることがベストです。標準と聞くと「普通の治療」「並の治療」のように思われるかもしれませんが、現時点で「最善・最良の治療」といえます。

わが国の国民皆保険制度のもとでは、標準治療は原則、保険医療に組み込まれます。自己負担の上限を定める「高額療養費制度」も使えますから、最善・最良の治療をリーズナブルな費用で受けること

ができるわけです。

一方で、有効性が検証されていない一部の免疫療法やエセ科学的な治療が「自由診療」の名のもとに行われているのは大きな問題です。

自由診療では、費用は医療施設側の言い値になりますから、保険診療より収益は高くなります。保険診療でもできるような治療を「最先端」と称して、自由診療で行うようなクリニックもあるようですから、要注意です。



イラスト 中村 久美

科学的効果が確認されていない「免疫療法」については国も注意を払っています。がん治療の拠点である「がん診療連携拠点病院」の指定要件にも、保険適応外の免疫療法を自由診療として行わないことが明記されています。

これまで標準治療といえど、手術、放射線治療、抗がん剤・分子標的薬が3本の柱でしたが、最近になって、新しいタイプの免疫療法が第4の柱となりつつあります。

「免疫チェックポイント阻害薬」と呼ばれる治療薬で、第1号となった「オプジーボ」はノーベル生理学・医学賞を受賞した本庶佑さんの研究がベースとなり、日本で世界に先駆けて承認されました。

私たちの体に備わっている免疫は、体外から侵入した細菌やウイルスのほか、自分の細胞が不死化したがん細胞も

攻撃してくれます。これが「免疫監視機構」です。

しかし免疫の働きが過剰に働きすぎると、自分の細胞まで攻撃してしまうことがあります。関節リウマチや故安倍晋三氏を苦しめた潰瘍性大腸炎などの「自己免疫疾患」の原因です。

このため、免疫細胞の過剰な働きを防ぐ「ブレイキのような仕組み（免疫チェックポイント）」が用意されています。がん細胞は自分の身を守ろうとこのブレイキを悪用して免疫の働きを抑制してしまっています。

免疫チェックポイント阻害薬は、このがん細胞によるブレイキを外し、免疫が正常に働くようにする薬です。

オプジーボに続き「キイトルーダ」「イミフィンジ」など多くの治療薬が科学的検証を経たうえで保険で使えるようになっていきます。

次回も、免疫チェックポイント阻害薬を取り上げます。

（東京大学特任教授）